六十五年を振り返って

足柄上郡支部　柏木　允（子）
戦没者　山田　武夫
戦没地　マレーシア

終戦から六十五年の歳月が過ぎました。

父親を亡くした私達家族は言葉では言い表すことのできない数々の困難を乗り越え、辛く淋しい日々の六十五年でした。父は戦地で私達以上に大変な日々を送った事と思います。

父は出征する時に自分が帰ったら織物工場を始める為に工場を建て、そして家族（祖父、祖母、叔父二人、叔母三人、母、私達兄弟四人）に、自分が帰って来るまでは田畑は他人に貸してはいけないと強く言い残して出征したそうです。その時は父も家族も必ず帰って来るものと信じていたそうです。

私は父との思い出は父が外地に出て行く前に家族に面会が許され父の部隊のある東京の麻布に家族で会いに行きました。その時の父は終始満面の笑顔で私達を力強く抱き締め頬擦りをし精一杯喜ばせてくれました。その時の温もりはつい昨日のような気がします。私はその時が父との最後だとは知らず騒ぎまわり、「今度は何時会えるの」と聞くと父は「又知らせるネ」と言って

©2011_財団法人神奈川県遺族会

黙ってしまいました。

後で考えると、その時の父の気持ちはとても辛かったと思います。面会の帰りは乃木神社にお参りをしました。その時の母は、いつまでも手を合わせている姿が今でも私の脳裏に焼き付いています。あの時の母は、父の無事を祈っていたのだと思いました。

その後面会の知らせはなく母宛に一通の手紙が届きました。その手紙は父からでした。父は外地に発つ最後の日トイレで自分の髪と爪を切り手紙の中の入れ旅館の女将に内緒で頼み投函してもらったそうです。その時父は既に戦地に発っていたのです。それからは家族は父の出征する時の言葉を信じ父の留守の間家族で力を合わせ父の帰りを待ちました。

そんな家族の期待も裏切られ、父の戦死の知らせでした。家族は「誤報だ」と信じませんでした。母は毎日のように占い師を尋ねて遠くまで出かけて行きました。夜は玄関は鍵をかけず父の帰りを待ちましたが帰ることはありませんでした。その後父の戦友の人達が家を訪れ父の話をしてくださったので、母を始め家族も父の戦死を受け入れられることができました。

その後祖父は床に付くようになってしまいました。叔父や叔母は私たちが大きくなるまで一生懸命家の力になり、母も小さい身体でこま鼠のように働き、私達も一生懸命手伝いました。一家の大黒柱が亡くなると総てが大変な事を実感しました。

その後父の遺骨が帰って来ると言う知らせがあり母と一緒に受け取りに行きました。家に帰って開けると中には白い紙に数本の髪が挟んであるだけでした。この髪も父のものか疑いました。

私達兄弟四人で夜になると空に向かって「お父さん何処にいるの、早く帰って来て」と大声を

©2011_財団法人神奈川県遺族会

張り上げ泣きました。父の声は聞こえません。私は、もう一度、夢でいいから父に逢いたかった。面会の時の父のあの笑顔は生涯忘れることはできません。昔の事を偲び、ふと気づくと私も後数年で父のなくなった年齢の倍も生きているのです。元気なうちに父のなくなった場所「マレーシア・ペラ州クアラカンサール南方第三陸軍病院」に行きたいと思っておりました。その念願が叶い昨年行ってきました。私が想像していたより遥かに開発されジャングルには油椰子が植えられ戦地だったとは思えぬくらい閑静な所でした。

病院の敷地はとても広く、現在はばら線で囲んである草むらでした。

私は父の踏んだと思う砂を袋に入れながら、父はこの地でどんな思いで最後を迎えたのでしょうか？それを思うと私も辛く胸にこみ上げるものがありました。

その時私は、父と再会したような気持ちになり父に勇気づけられたようでした。私も心が落ち着き、来てよかったと思いました。

私も三人の娘の母となり改めて亡き母の偉大さを再認識致しました。また父からはどんな事にも耐え強く生きる事を学びました。これは亡き父からもらった貴重な宝だと思っております。

今の私の願いはこの世の中から戦争が無くなってほしい事です。声を大にして言いたいです。

現在日本の平和は、先の戦争で犠牲になった人達の礎だという事を決して忘れることはできません。

戦争の悲惨さ、平和の尊さを次の世代に語り伝えていくことが私達の責務だと思います。

©2011_財団法人神奈川県遺族会